

第7回越境地域政策研究フォーラム
分科会2「越境と地域システム」

「まちづくり」に向けた地域調査の実践
—豊橋まちなかにおけるゼミ活動を通じて—

駒木伸比古（愛知大学）

1. はじめに

「地域再生」, 「地方創生」など地域に関する取り組みが注目されるなかで, 「まちづくり」に対する注目は年々高まっている。そして, 都市工学, 建築学, 土木工学, 社会学, 芸術学, そして地理学など, 様々な分野からのアプローチがあり, それぞれ地域と関わりながら研究・調査活動がなされている。学問とまちづくりとの関わりについては, (1) まちづくりに関連した書籍や論文の執筆, (2) 自治体の各種委員会における学識経験者としての参加, (3) 市民講座における地域学習講師としての講義, (4) 演習科目としての地域調査の実施, (5) 学生参加型学習の一環としてのまちづくりイベントへの参加などが挙げられるが, 本発表では特に(4)に示した「地域調査の実施」に注目したい。

発表者はゼミ活動において, 地理学的視点に基づき豊橋市まちなか(豊橋駅前)を対象とした地域調査を実施してきた。そこで本発表では, そうした地域調査の実践を紹介・整理するとともに, 「まちづくり」に向けたその意義を検討していく。

2. 地域調査とは

梶田ほか(2007)は, 地域調査に関して, (1) 魅力は現実の世界から得られたデータをもとにして説得力のある研究ができること, (2) 本質は自分の足で現場に赴き地域の姿を目で見るとともに地域の様々な人々と話をしていくなかで諸現象を理解していくこと, (3) その姿が調査者の中に鮮明に描き出されるようになってはじめて既存の研究を批判的に検討していったり調査手法や論点を詰めていけること, の3点を指摘している。これらは地理学分野からの指摘であるが, こうした視点は住民主体の「まちづくり」を行ううえで重要になる。なぜなら, 「まちづくり」はその地域に実際に住んでいる人たちが中心となって当事者として自分たちの住む地域に関わる問題に関して行う活動であり(西村, 2004), そのためには自らの五感を通じて, 地域を知る必要があるからである。

3. まちなかの課題とそれに対する地域調査活動

豊橋市まちなかには, 商店街における商業機能の低下, マンション建設にともなう住民属性の変化, 「にぎわい創出」に向けた各種まちづくり活動の調整, 再開発事業への期待とその活用方法の模索, などの課題やテーマがある。発表者のゼミでは, 以下の5つの視点から地域調査を実施している。

(1) 過去から現在にかけての土地利用調査

まちなかに限らず, 地域における機能の移り変わりを把握する際には, 「土地利用調査」が有効である。吉田(2013)は, 土地利用の把握は, 研究対象市域の動態を分析・考察していくためのファーストステップであると述べている。

そこで, 豊橋市まちなか(豊橋駅前)を対象とした土地利用調査を実施, GIS データ化を行っている。そして, 結果(地図)をまちづくりイベントなどで発表・掲示している。これらの活動を通じて, 参加者(来場者)に“かつてのまちなかの姿”や“当時の思い出”を喚起させたり, まちなかの将来を考えるにあたってのきっかけとなることを目指している。また, 場所がかつて持っていた役割や意味などを明らかにするとともに, 場所の物語を具体化する役割を見いだせる。

(2) フィールドワークに基づく地域資源の発掘

まちづくりにあたっては, 地域資源の発掘がポイントになる。地域住民にとっては当たり前のものや地域資源と見なされてこなかったものが, 地域外の人々(ヨソモノ)にとって「地域資源」となる可能性がある。

そこで, フィールドワークに基づく地域資源探しを実施している。写真で記録するとともに, GPSなどを援用してGIS データ化した。そして, 発掘した「地域資源」をまちづくりイベントなどで発表・掲示したり, Web サービスを通じて発信することで, 地域住民に対して新たな「地域資源」の存在や活用を提示している。学生にとっては普段歩かない場所を調査することで, オリジナルな視点を持つきっかけにもなっている。

(3) まちづくりイベントへの参与観察・活動

「まちづくり活動」の持続可能性を探る際には、その活動実態の分析・検討が必要である。

そこで、まちなか（商店街）を対象として活動するまちづくり活動団体“とよはし都市型アートイベント「sebone」”に参加し、その運営方法などについて参与観察を行うとともに、メンバー間の社会的ネットワークを調査した。その結果、現在までの持続要因を指摘できるとともに、論文や書籍の形で紹介することができた。その後も、sebone への参加は継続しており、ゼミ活動にとってなくてはならないものとなっている。

(4) まちあるきに関するイベントへの協力

近年の「まちあるき」ブームに見られるように、地域の地理・歴史的な特徴や最近のトレンドなどを知るきっかけには、実際に歩いて巡る体験が有効である。

そこで、前述の sebone が主催するまちあるきをはじめとして、豊橋市まちなかで開催されるいくつかの「まちあるきイベント」、「まち調べイベント」に参加している。また、sebone イベント時には、調査研究を行った学生が計画・立案したまちあるきを実施しており、「学生参加型学習」としての役割も持たせている。

(5) 地域の場所・空間に対する“想い出”の調査

「まちづくり」を行うにあたっては、賛同や共感が得られるようなストーリーが不可欠である。場所や空間へのまなざしを通じて、「まちづくり」を行う場所や空間へのアイデンティティが具体化される。

そこで、まちなかにおける“想い出”をヒヤリングし、地域の場所・空間を踏まえてそれらの結果をまとめた。その際には、年齢や性別による違いや共通して出現する場所などについて示した。またヒヤリング時には、現在のまちなかに対するとらえ方や、再開発などを含めた今後のまちなかへの期待についても聞き取った。こうした取り組みは、今後のまちなかをどうとらえているかの把握につながると考えられる。

4. おわりに

以上に示した「まちづくり」に向けた地域調査を通じて、「場所」や「空間」といった視点に基づき地域における様々な事象を分析・整理し、地域に提示することの重要性を指摘したい。こうした活動により得られた結果は、地域が有する魅力・資源を「残す」、「壊す」、「活かす」、いずれを選択していくかの際の判断材料になりうる。そして、地域調査を通じて、それぞれの学問としてステークホルダーと協力してできることは何か、担当できることは何かを、具体的に考えていく必

要性があるのではないか。ただし、「まちづくり研究」においてはアカデミックな立ち位置の確保が必要であり、「プレイヤー」、「プランナー」としての立場にありすぎると相対的な考察や分析などが難しくなる可能性にも留意すべきであろう。

今後は、「豊橋まちなか会議」が募集している“まちじゅうステージプロジェクト”のなかで、今まで行ってきた調査活動経験を踏まえた地理学的見地に立つプロジェクトを実施計画中である。『地図で見る思い出写真館』と名付け、豊橋まちなかでの出来事（ハード・ソフト、オフィシャル・プライベート含めてさまざまなテーマ）をデータベース化し、年表や地図などの形式で提供することを考えている。具体的には、過去を含めたまちなか景観の「写真」を集めるとともに、その写真にまつわる「語り」を聞き書きの手法を用いて収集し、そのデータを Web (GIS) 上でオープンデータとして公開するというものである。

過去の記憶は失われてしまうが、それらを収集して誰もが関わりをもてる形で蓄積し、場所の成り立ちについて整理・可視化することで、場所の特性を浮き彫りにするとともに、その特性を活かした活動につなげるきっかけとなることを狙っている。結果については、改めて発表したい。

本発表は、日本地理学会 2017 年秋季学術大会（三重大学）で開催されたシンポジウム『地域課題の発見から解決に向けた地理学と隣接分野のアプローチ』にて、「民官学の協同による地域課題へのアプローチ—地方都市での「まちづくり活動」の経験を通じて」のタイトルで発表したものをベースに、新たな知見やデータなどを加えたものである。関連文献は、秋山（2017）および駒木（2018）を参照のこと。

参考文献

- 秋山千亜紀（2017）：地域課題の発見から解決に向けた地理学と隣接分野のアプローチ。E-journal GEO, 12(2), 322-328.
- 梶田 真・仁平尊明・加藤政洋編（2007）：『地域調査ことはじめ—あるく・みる・かく』ナカニシヤ出版, 257p.
- 駒木伸比古（2018）：地域政策学に対する地理学の役割と期待—豊橋まちなかでのまちづくり活動を通じて。地域政策学ジャーナル, 7(2), 71-73.
- 西村幸夫（2004）：『まちづくり学—アイディアから実現までのプロセス』朝倉書店, 128p.
- 吉田国光（2013）：土地利用調査。人文地理学会編『人文地理学辞典』134-135.